

〈現場から〉

生きた教材を

高橋 飛鳥

中学校の現場で教壇に立つてから、約2年半が過ぎた。生徒の実態に合わせて授業することの難しさを日々感じている。万全の体制で挑んでも振り返りに遭い、そうかと思えば予想以上の生徒の反応に驚かされたりすることもある。苦しいことや辛いことが多いが、最近では、時折みられる生徒の成長や、生徒の「わかった」「できた」という瞬間に立ち会えることの喜びを感じられるようになってきた。

大学時代、メディアリテラシーに興味を持ち、NIEについて学んだ。「日常生活で行われる「読む」「聞く」「書く」「話す」をより豊かにするために、国語科の授業をする。」そういう観点からみると、日常生活と深く結びつく新聞を授業に用いることは大変有意義であると感じた。教壇に立つてからは、授業の中で少しずつ実践してきた。その実践をいくつか報告したい。

自分の持っている力を応用できるようにと、中学三年生の3学期に、新聞のコラムを使って毎時間小テストを行った。新聞のコラム一つを教材とし、「動詞を全て抜き出せ」「漢字すべてに読み

がなをふれ」「作者の意見を抜き出せ」というような問題を出した。教科書や問題集などの解き方に慣れている生徒たちは、新聞のコラムが問題になると初めは戸惑っていたが、次第に楽しみながら問題を解くようになった。自信をつけた生徒もいた。

ある新聞社で、働く若者の現状を取り上げた特集が組まれていたときは、その特集記事を使って進路の学習を行った。若者のリアルな姿が描かれた記事には、生徒自身に共感できる部分も多く、普段新聞は読まないという生徒も、真剣に読んでいた姿が印象的だった。高校進学を控え、ただなんとなく高校へ進めばいいと考えていた生徒にとつては、将来働くために高校で何をしなければならぬのかを考えさせるいいきっかけになった。

投書を使った学習も行った。新聞に掲載されている投書から、投書の中で使われている「自分の意見を効果的に伝えるための工夫」を学んだり、他の投書と比較させて、どちらがよりよい投書か、よりよい投書にするためにはどうしたらいいかを考えさせた。応用として生徒にも投書を書かせた。取り上げた投書の内容が生徒にとって身近であったため、それぞれが自分の意見を持つことができ、文章を書くことがスムーズに進んだ。また、文章を書くのが苦手な生徒も最後まで投げ出さず取り組むことができた。

実践の後、「テレビ欄以外も読むようになった」とか「あの記事読んだ?」と生徒から声をかけられると、生徒は少なからず新聞に興味を持つようになったと感じる。活字離れが叫ばれて久しいが、生徒が活字に触れる機会が少しでも増えれば、それだけでも授業に新聞を用いた効果があると思う。

鍋ぶた事件の教え

水島千絵

「先生、なんとかして下さい！」

夏休みの林間学校。キャンプ場での飯盒炊爨を終え、少し離れた場所にある宿泊施設で、使い終えた鍋や飯盒を洗っている場面。洗い物係の生徒は四人いた。最初はワイワイ言いながら楽しそうに洗っていた。ところが、キャンプ場に鍋ぶたを忘れたことに気づいたときから、事態は急転する。一体だれが鍋ぶたを忘れたのかから始まり、誰がそれをキャンプ場まで取りに戻るか、でまたひと悶着。ようやく一人がそれを取りにいった。が、今度は思いのほか戻ってくるのが遅い。遅いことに関する文句は、やがては「あいっつていつも空気読めなくない!」という個人攻撃へ発展。悪口に花を咲かせているところへようやく鍋ぶたを抱えて一人が到着。「遅いよ、何やってんだよ。」「キャンプ場で片付けを手伝ってたんだからしょうがないだろ。」「こっちは待つてんだよ。」「オレだって遊んでたわけじゃないんだよ。」「……三対一だから鍋ぶたの彼は形勢不利になる。そのやりとりの一部始終を黙って見ていた私に、鍋ぶたの彼が言ったのが、冒頭のセリフである。

林間学校を通して感じたことは二点ある。ひとつは、ちよつと

した挨拶の不足。鍋ぶたを待つていた生徒たちが、もし取りに戻った生徒に「ありがとう。」の一言を言った上で、「でも何で遅かったの?」と聞いたとしたら? 取りに行った生徒も、遅くなったことに対して「ごめんね。」の一言があつたら?……互いに悪い気はしないだろう。集団生活を送る上では、ウマが合う人間ばかりとは限らない。そのときに、ちよつとしたひとことが言えるかどうかで、人間関係は大きく変わってくる。

それともうひとつ。「聴く」姿勢の欠如である。彼らは失敗は他人のせいにし、ひとからの指示は「どうせ誰かが聞いているだろう。」と他人任せにする傾向がある。今回の鍋ぶたの件にしてもそうだし、すぐに教員に解決を求めてくることも不思議である。友人の話を聴き合い、ちよつとした謝罪をすれば収まる話ではないのだろうか。

この奇妙な他力本願と自己主張の混在を教室でもよく目にする。しかし、解決するのは実に簡単なのである。人の話を「聴く」こととちよつとした挨拶をすることである。彼らの多くはそんな簡単なことに気がつかない。気づいていても照れてできない、のではなく、他人がどう思うか考えるに至らないらしい。

しかし、彼らは入学してきたばかりの中学一年生である。授業を通して、文学作品を通して、学校での生活を通して、やはりそれを教えていかなければならないのである。

その一歩として、この思いを林間学校の最終日に生徒に伝えた。これからである。

(早稲田中学校・高等学校)

ある公立高校の現場から

矢 持 昌 也

現在、公立高校は私立高校との競合だけではなく、同じ公立高校とも競合しなければならない。切磋琢磨してお互いを高めめるという反面、苛酷なサバイバルレースとも言える状況である。

現在私が勤務している学校は創立百十周年を迎えた伝統校であるが、近年地域ナンバー1の座を他校に奪われた。そこで、2番手校に甘んじるわけにはいかず、その奪回を目指し日々努力している。従って、生徒の一層の学力向上が喫緊の課題となっており、生徒による授業アンケート、お互いが授業を見合う授業研究週間の設置等の教員個々の授業改善をまず行うなど、生徒の学力向上に向けて様々な取組を進めている。

そこで、日々の授業、特に3年生では入試問題に触れることが多くなる。例えば、「大鏡」の花山帝の出家の段を学習する際、教科書所載の系図に一条帝が出てくるので、「この一条帝はしっかりと覚えておこう。定子と彰子が皇后として並び立ったこと、清少納言や紫式部がそれぞれの女房として出仕したことと有名だが、去年、早稲田の文学部の問題文の『無名草子』は、この一条帝が登場する話だったね。」などと話すと、とりあえず生徒は

食いついてくるし、そのような話をしてくれる教師こそ力もあり、生徒のことを考えてくれる教師だと素直にも思ってくれる。また、もつと直接教材に関連した過去問を用意して授業に臨むと、ある程度の進学校ならば、無難に授業は進んでいくのである。もちろん、これでいいのかと教える側は自問しながらも。

そのような中、先日、早大の石原千秋先生に本校で模擬授業をお願いする機会があった。高校生にとって比較的難しいと思われる評論文、「衣服という社会」（北山晴一）と「私」を置き去りにする身体」（黒崎政男）を教材として授業をしていた。最近の教科書教材は簡単な作品が多く、生徒に難しい文章を読ませたいと意図したためである。とは言うものの、日頃の我が校の生徒の様子を見ると、生徒は難しすぎて授業についてこれないのではないかと心配したが、それは杞憂であった。本校の生徒達は実に熱心に先生の講義に聴き入り、終わつた後に感想を聞くと異口同音に「面白かった」「楽しかった。」という答えが返ってきた。繰り返すが、決して簡単な評論文ではない。それを石原先生は、様々な現代思想にも触れながら、「社会・身体・私」というキーワードを用いて実に分かりやすく説明されたのである。生徒の心をとらえたのは、テクニクとしての読解ではない。石原先生の確かな研究と考察に基づく、まさに「知」を生徒達は感じとつたのである。今一度、国語科教師としての立脚点を見つめ直すことができた先生の授業であった。模擬授業を受けて一歩役に立ったのは、生徒ではなく実は私であったのだ。

（埼玉県立所沢高等学校）

「自己学習能力」育成のための「芽」を探す

安 木 裕 香 織

国語科の教員として新しいスタートを切って半年が過ぎました。私が勤務している学校は中高一貫の私学で、私は現在中学校二年生および三年生の現代文、古典、表現の授業を担当しています。大学院生時代に研究してきたことを現場で様々な角度から実践する日々を送っています。

二〇〇八年一月に提出した私の修士論文は「高等学校国語科における評論文指導―『自己学習能力』育成の視点から―」と題し、評論文を使った学習において多角的に自己と他者をモニタリングする活動を取り入れ、学習前後での学習者自身の考え方の変化を捉えさせることの重要性について論じたものでした。物事をクリティカルに思考する力は情報氾濫社会である現代に必要不可欠であり、また学習者が積極的に学習に向かうためには自己が成長しているという実感を得て、自己肯定感を高めることが重要であると私は考えます。

以上のことを胸に国語科の授業で学習者に接する中で、いろいろと感じることがありました。その中から特に強く感じている問題意識を提示したいと思います。それは、学習者が自分自身の考

えを的確に言葉で表現することをあまり得意としていないという点です。スピーチの原稿を書かせても情報の羅列、書物の著者の考えを引用することに終わってしまう学習者が多くいるのです。物事に対して自分自身が現在どのように考えているかということ

を整理し、またその考え方が学習を経てどのように変化するのかを理解するためにはこの表現力が必要不可欠になります。しかしこの能力が十分に身につけていないため、多角的に自分自身を振り返る経験が少ない学習者が目立つというのが現状です。

また現在私が担当しているのが中学二、三年生という年代であることもあり、学習者は自己と他者の意見の相違に対して敏感に反応する傾向があります。この傾向は集団での話し合い活動などで意見が出にくいなどの難しい面はありますが、それと同時に、学習者が他者の考え方をクリティカルに聞くことを経験できる可能性を秘めているということでもあると思います。学習者はクラスメイトの発表に敏感に反応するのです。表現の授業におけるスピーチ、現代文の授業での作品に対する感想の発表時などにおける学習者の集中力は目を見張るものがあります。

現在は学習者の「自己学習能力」育成のための芽を探しつつ、それをどのように授業開発に結びつけていくのかを模索する日々です。学習者には他者への関心をそこで終わらせることなく、自己の考えを振り返る学習に結びつけてほしいと思います。そしてさらに情報を駆使しながら自己の考えを表現できる学習者を育成できるよう、実践に励みたいと思います。

(渋谷教育学園・渋谷中高)

古典を身近に感じさせる授業をめざして

塩田 妙子

埼玉県立高校に本採用になり、二年が経とうとしている。休み時間や放課後にも、生徒指導のため校舎内を見回りながら、生徒と触れ合う毎日だ。本校の生徒たちは、中学卒業までの学習内容の積み残しが多く、勉強に苦手意識を持っている者がほとんどである。まして「意味わかんない」「どうせ役に立たない」と古典には消極的になってしまふ。そこでなんとか古典を身近に感じさせ、おもしろいと思わせるような授業をしたい、と日頃考えている。

二年生の「古典講読」で、以下のような授業を行った。教材として『徒然草』第九十二段「ある人、弓射ることを習ふに」・第百九段「高名の木登り」・第百十段「双六の上手と言ひし人に」を用い、「三人の達人の言葉や兼好の感想を理解し、その価値を考え、生活に生かす態度を育てる」ことを目標とした。授業にあたって、活動を多く取り入れ、また、小さな達成感を積み重ねられるように工夫をした。具体的には次のような点を心がけた。

○プリント学習……一時間に一枚のプリントを完成させ、必ず提

出させることを昨年度からの習慣にし、進級を意識つけた。
○音読の励行……毎授業欠かさず音読を行い、全員に声を出させた。

○フラッシュカードの利用……厚紙の表面に古語、裏面にその語の読み方や意味を書いたものを示して、繰り返し学習させた。

○古語辞典の活用……一人一冊貸し出し、自由に引かせた。

○現代語訳の提示……内容を理解させることに主眼を置いたので、一部の重要古語の部分を除き、現代語訳をプリントに掲載した。

○意見文・感想文を書かせる……本単元の中で三回実施した。いずれも身近な具体例を挙げて書くように指示。その際に、書き出しの言葉の例や作文の型を示し、書くことへの抵抗を少なくした。

書くという表現活動を通して、生徒は作品を見直し、先人の言葉を自らに引きつけて考えることができたようだ。「弓の師」の教えからは、テニスのサーブ、ハンドボールのシュート、書道での心構えなどを持ち出し、「自分の気持ちに重なった」「勉強になった」と書いた。また「双六の上手」の言葉については、バレーやサッカー、体育祭のロープ引きなどの例を挙げ、「慎重さ」「守りに集中」という言葉を出しながら、納得していた。三つの段を通しての感想では、「徒然草の名言が現代を生きる私たちにそのままあてはまっている」というものも見られた。

生徒たちの心に、古典の種をまくつもりで指導にあたっている。未熟ではあるが、先生方にご指導を仰ぎながら、また、生徒たちとの格闘の中で日々学びながら、より良い国語教育を模索していきたい。

(埼玉県立吉川高等学校)